

# 大阪における男女共学・別学高校の生徒文化

木村涼子 (大阪大学)

古久保さくら (大阪市立大学)

○ 今田絵里香 (日本学術振興会特別研究員)

○ 土田陽子 (京都大学大学院)

## 1 はじめに

戦後の教育制度改革によって、公立小学校・中学校はすべて、新制の高等学校も東日本を中心としたいくつかの県以外の多くが男女共学となった。公立高校が共学化された地域では、男女別学の流れは私立学校によって担われてきた。今回、調査対象とする大阪府の場合、高度経済成長期以降私立高校は高等学校進学者の3割強の比率を占め

(2004年度時点で在高校総生徒数の約38%)、地域の後期中等教育において大きな役割を果たし続けてきた。伝統・特色あるカリキュラム・進学実績など、各学校が打ち出すカラーの多様性ととも、男子校・女子校という別学校が多いということも私学の特徴であった。

現在大阪府では私立中学・高校の共学化がすすみつつある。かつては圧倒的マジョリティであった別学校は年々減少し、現在全93校中別学校45校に対して共学校48校と共学校が過半数を超えている。そうした状況下において、別学校から共学化した学校、別学維持を掲げている学校など多様な学校を対象に、別学・共学をはじめとした各学校の教育環境や生徒文化の特色を、ジェンダーの形成という観点から考察することが本発表の目的である。

## 2 調査の概要と分析対象の説明

### (1) 調査の概要

調査対象：大阪府内の私立高等学校7校（男子校2校、女子校2校、近年共学化した共学校3校）の2年生

調査時期：2004年1月～3月

調査方法：質問紙調査（各学校の協力により教室において実施）

有効回答数：1621ケース

### (2) 分析対象の設定

本研究では7校のデータの中から、共学・別学の違いだけでなく、入学難易度・進学実績や学科・カリキュラムの特徴をもとに8タイプに分類したものを分析対象とする。(表1参照)

なお、学科名は学校名が特定されることを避けるため、学科・カリキュラムの特徴をあらわす名称にしている。

## 3 分析結果

### (1) 生徒の意識

#### i) ジェンダー観の特徴

各タイプによって、ジェンダー観にはどのような違いがあるのだろうか。

質問紙ではジェンダー観に関して、11項目の問いを用意し、「非常にそう思う」～「全くそう思わない」の4段階で回答を求めた。女子と男子に分けてクロス集計を行った結果、女子は13項目中11項目、男子は8項目において統計上有意な差が認められた。特徴的な項目について結果を見ていくことにしよう。ここでは「非常にそう思う」+「どちらかといえばそう思う」の値について比較していくことにする。

女子生徒のジェンダー観については、4つの各タイプによっていくつかの傾向が見出せた。全体的にみて、タイプ4の「エリート・共学校」の生徒が最も旧来の保守的・伝統的なジェンダー観を

(表1) 分析対象の概要

	女子				男子			
	タイプ1	タイプ2	タイプ3	タイプ4	タイプ5	タイプ6	タイプ7	タイプ8
対象高校	A高校	B高校	C高校	D・E高校	F高校	F高校	B高校	G高校
入学難易度+卒業後の進路	ノン・エリート	ノン・エリート	サブ・エリート	エリート	ノン・エリート	ノン・エリート	ノン・エリート	エリート
別学・共学	女子校	共学校	女子校	共学校	男子校	男子校	共学校	男子校
学科	普通科	普通科	国際科	特進科	普通科	キャリア科	普通科	特進科
データ数	85	75	145	89	125	108	99	93

支持する割合が低いという特徴があるということがいえる。その対極にあるのが、タイプ2にあたる「ノン・エリート共学校」である。たとえば、「夫は外で働き、妻は家庭を守るべきである」という質問では、他の3つのタイプすべてが「そう思う」のが1割～2割の間なのに対し、「ノン・エリート共学校」の値は4割近くにのぼる。また、「女性は男性をたてる方がよい」でも、他がすべて2割台なのに「ノン・エリート共学校」は5割以上の生徒が支持している。もうひとつ、ジェンダー観について興味深い傾向を見せるのがタイプ3にあたる「サブ・エリート女子高」の生徒である。彼女たちは、「男性は女性を守るべきだ」「女性には体力・精神力の面で向かない仕事もある」といった項目で支持率が高く、「ノン・エリート共学校」と非常に似た傾向を見せるのである。さらに特徴的なのが、「今の自分の性に生まれてよかったと思う」が9割以上とずば抜けて高く、この点も興味深い結果である。

男子生徒のジェンダー観については、女子生徒よりも有意差の項目は少なかったが、タイプによって共通した傾向はいくつか見られた。総じていえることは、男子の場合も「エリート」にあたるタイプが最も男女の役割分業や男性規範、女性規範に関して支持する割合が低い。その反対の傾向をもつのが「ノン・エリート男子校の普通科」である。

## ii) 自尊感情の特徴

では、自尊感情についてはタイプ別にどのような特徴が見られるだろうか。ここでは、「とてもあてはまる」～「全くあてはまらない」の4段階で尋ねた自尊感情に関する10項目のうち、「親は私に大きな期待をかけている」と「自分とは違う人間になってしまいたい」について、「とてもあてはまる」+「ある程度あてはまる」と答えた比率の結果に着目していくことにする。

女子の場合、どちらの質問の結果もタイプ1タイプ2の「ノン・エリート」と、タイプ3の「サブ・エリート」タイプ4の「エリート」で回答の傾向が分かれる。たとえば親の期待については、「ノン・エリート女子校」が34.5%、「ノン・エリート共学校」が35.7%、「サブ・エリート女子高」が53.3%、「エリート共学校」で47.2%という値である。自己否定の項目についても、「ノン・エリート女子校」が54.7%、「ノン・エリート共学校」が52.7%なのに対して、「サブ・エリート女子高」で36.3%、「エリート共学校」で40.4%と、「ノン・エリート」にあたる2つのタイプより

も値が低くなる。これら2つの項目で、どちらも最も自尊感情が高いのは「サブ・エリート女子校」である。

一方男子の場合、親の期待に関しては「エリート男子校」が最も高く、次が「ノン・エリート男子校の普通科」「ノン・エリート共学校の普通科」「ノン・エリート男子校のキャリア科」の順で値は下がっていく。自己否定に関する項目では統計的に有意な差は見られなかった。

## iii) 将来展望

将来展望については、11項目を用いて因子分析を行ったところ、「社会・経済的成功志向」「幸せな家庭生活志向」「努力・競争回避志向」の3因子が抽出された（主因子法・バリマックス回転・累積寄与率44.9%）。結果は表2に示している。そして、各タイプ別に因子得点の平均値を求めたものが表3である。

表2 将来展望についての因子分析結果

	因子1	因子2	因子3
	社会・経済的成功志向	幸せな家庭生活志向	努力・競争回避志向
社会で成功したい	0.770	0.127	-0.029
社会で自分の能力をためたい	0.731	0.104	-0.153
社会のために役立つことをしたい	0.555	0.245	-0.016
経済的に今よりも豊かな生活をしたい	0.517	0.222	0.071
大人になったら稼ぐのが当たり前だ	0.488	0.172	-0.003
結婚して幸せな家庭を築きたい	0.251	0.838	0.066
将来、子どもをもって親になりたい	0.193	0.698	0.044
愛する人と結ばれることが最も重要だ	0.322	0.680	0.104
努力はなるべくしたくない	0.002	-0.024	0.638
自分はフリーターになるかもしれない	-0.060	0.012	0.605
人と競争するのはいやだ	-0.005	0.117	0.386
寄与率(%)	19.5	16.6	8.8

表3 各タイプ別 因子得点の平均値

		因子1	因子2	因子3
		社会・経済的成功志向	幸せな家庭生活志向	努力・競争回避志向
女子	タイプ1	-0.300	-0.010	0.057
	タイプ2	-0.465	0.031	0.202
	タイプ3	0.126	0.209	-0.245
	タイプ4	0.004	-0.012	-0.137
男子	タイプ5	0.202	0.173	0.027
	タイプ6	-0.098	-0.193	0.255
	タイプ7	0.155	0.035	0.200
	タイプ8	0.163	-0.246	-0.273

これらの結果からは、次のことがいえる。女子の場合、「社会・経済的成功志向」「幸せな結婚生活志向」ともに最も値が高く、「努力・競争回避志向」についても最も低い値をもつのは、タイプ3にあたる「サブ・エリート女子校」である。それに対し、「社会・経済的成功志向」が最も弱く、「努力・競争回避志向」が強いのが、タイプ1にあたる「ノン・エリート共学校」である。興味深いのは、同じ「ノン・エリート」で比較した場合、女子校よりも共学校の方が、こうした傾向が強いことである。

一方男子の場合は、「社会・経済的成功志向」「幸せな結婚生活志向」ともに高く、「努力・競争回避志向」が若干高いのが、タイプ5にあたる「ノン・エリート男子校の普通科」である。同様の傾向を見せながら、「努力・競争回避志向」の値がさらに高いのが、タイプ7の「ノン・エリート共学校の普通科」である。そして、「社会・経済的成功志向」が高く、最も「努力・競争回避志向」が低いのが「エリート男子校」の生徒ということになる。

## (2) ネットワーク

それでは、このような意識の違いはどうして生じるのだろうか。別学・共学が形成するピア・グループなどの高校生のネットワークが、高校生の意識になんらかの影響を与えているのではないだろうか。このような問題意識から、ここでは、高校生のネットワークのありようそれが高校生のジェンダーの社会化にどのような影響を与えているのかということをはっきりと明らかにしていくことにする。

### i) 同性の友人

まず、高校生の同性の友人はどのような人だろうか。男子・女子とも「同じ学校の人」と答える割合が圧倒的に高く、特に女子はどの高校も95%前後であった。男子は7~9割であった。次に高い割合を示すのは「塾や予備校で一緒の人」であるが、最高の割合の「エリート共学」の女子でもせいぜい3割程度にすぎない。したがって、学校こそがピア・グループ形成の主要な場であるといえてよい。

興味深いのは、「同性の友人はいない」と答える高校生は全体をながめてもほとんどいないということである。それでも男子の場合はどの高校も数%存在するが、女子の場合はすべての高校で0%なのである。女子高校生にとって、同性の友人は不可欠な存在であるといえる。

それでは、高校生は同性の友人とどのようなつ

きあいかたをしているのだろうか。「悩みを相談できる人」、「一緒に遊びに行く人」、「メール・電話・手紙のみのつきあいの人」について、人数を尋ねてみた。この三つの項目のなかでは「悩みを相談できる人」がもっとも親密度の高い人であると思われるが、これについては全体的に「2~3人」と答える人が多かった。しかし、女子の場合、「0人」はどの高校も数%だが、男子の場合、10%台であった。つまり、女子よりも男子のほうが悩みを相談できる同性の友人が少ないといえる。最後に「メール・電話・手紙のみのつきあいの人」の人数については男女差が存在した。男子はどの高校も「0人」が2~3割で多数派となっているが、女子は全体的に「6~10人」か「11人以上」が2~3割で多数派なのである。女子はメール・電話・手紙のつきあいが頻繁であることがわかる。

### ii) 異性の友人

次に異性の友人はどのような人であろうか。当然、共学は「同じ学校の人」の割合が高かった。着目すべきは、「友達からの紹介」の項目で、「サブ・エリート女子校」と「ノン・エリート男子校 普通科」が5割という高い割合を示していることである。一部の別学校では、異性を紹介するネットワークが確立していることが確認できよう。

また、「異性の友達はいない」の項目ではどの高校も数%から10%台なのだが、唯一、「エリート男子校」のみ26.1%という高い割合を示していることがわかった。この高校は「恋人はいない」と答える割合も高く、88.2%であった。もともと、「ノン・エリート男子校 キャリア科」も8割弱が「恋人はいない」と答えているが、そのほかの高校生男子は6割前後であった。女子の場合、8割から10割が「恋人はいない」と答えているが、「ノン・エリート共学校」の女子だけが74.7%であった。女子のなかでは「ノン・エリート共学校」の女子が比較的恋人を持っている割合が高いといえる。

それでは、異性の友人とのつきあいはどのようなものだろうか。「恋人」、「グループでつきあう程度の人」、「メール・手紙・電話のみのつきあいの人」、この三つの項目で人数を尋ねてみた。その結果、やはりどの項目も「エリート男子校」の生徒は異性とのつきあいが群を抜いて少なかった。

### iii) ネットワークの機能

それでは、このような高校生のネットワークがどのような機能を持っているのか、明らかにして

いくことにしたい。ここでは、悩みを相談するという、もっとも親密さを表す行動について調べてみた。

いったい高校生は悩みを誰に相談するのだろうか。「母親」、「父親」、「異性のきょうだい」、「同性のきょうだい」、「異性の友達」、「同性の友達」、「恋人」、「学校の先生」、「その他」、「誰にも相談しない」という項目で尋ねてみた。やはり女子のほうが男子よりも母親に相談する割合が総じて高いことがわかった。女子と母親の関係の親密さがうかがえよう。とりわけ、女子のなかでも「サブ・エリート女子校」と「エリート共学校」の女子でその傾向が顕著であり、エリート高校の女子ほど母親との関係が良好であるといえる。

一方、「父親」、「異性のきょうだい」、「異性の友達」、「同性のきょうだい」、「恋人」、「学校の先生」は総じて低い割合であった。高い割合を示すのが、「同性の友達」で、とりわけ女子にいちじるしい。男子は6割前後だが、女子は最低でも74.4%（ノン・エリート女子校）で、最高は「サブ・エリート女子校」89.9%であった。

#### iv) ピア・グループについての意識

以上の結果から浮かび上がってきたのは、女子にとって、別学・共学を問わず同性の友人が不可欠であるということである。女子は必ず同性の友人を持ち、悩みを相談するなど、親密な関係を築いている。とりわけ、「サブ・エリート女子校」の女子ほどこの傾向が強い。この高校の女子は友人ネットワークを利用して異性を紹介してもらうということも盛んにおこなっている。しかしながら、興味深いことに、彼女らが悩みを相談するなどして親密につきあっているのは異性ではなく、同性なのである。

そこで、共学・別学という空間が形成するピア・グループについて、高校生がどのような意識を持っているのか調べてみた。

すると、驚くべきことに、「別学だと異性がいなくて気楽」や、「別学の方が同性集団で親密になれる」、「別学の方が異性の目を気にせず個性や能力を発揮できる」という項目で、「サブ・エリート女子校」の女子はずば抜けて高い割合で肯定していることがわかった。

#### 4 まとめ

ジェンダー観、自尊感情、将来展望、ネットワークについての分析から、以下のような点が明らかになった。

8タイプの調査対象を比較したところ、それぞ

れタイプ別に異なる意識をもっていることが確認できた。しかし、その意識の差のあらわれ方は、男子と女子で異なることがわかった。男子は「ノン・エリート」と「エリート」の間に大きな違いが見られたが、女子の場合は「女子校」と「共学校」の間にみられる差が特徴的であった。その中でも特に興味深いのが、「サブ・エリート女子校」と「ノン・エリート共学校」の女子生徒であった。

「サブ・エリート女子校」の女子は、意識の分析のところで明らかにしたように、比較的自尊感情が高く、「社会・経済的成功志向」・「幸せな結婚生活志向」も強い。しかしながら、一方で、「男性は女性を守るべきだ」、「女性には体力・精神力の面に向かない仕事もある」という項目には肯定する割合が高く、自らの「女性性」を充分に認めているのである。そしてそのうえで、「今の自分の性に生まれてよかったと思う」とその「女性性」を肯定しているのがであった。ここから、「女性性利用型」ともいうべきしたたかな生き方が浮き彫りになってくる。すなわち、自らの「女性性」を認めつつ、それを肯定し、さらにはその「女性性」をもってして「社会・経済的成功」と「幸せな結婚生活」を同時に実現しようと目論む生き方である。そしてそのような「女性性」の肯定は、男性との関係よりも女性同士の関係を重視することで、ますます強められるのではないかと思われる。また、この高校が語学に重点を置く教育をおこなっていることも、「女性性」の肯定を強める一因となっている。いうまでもなく、伝統的に「女性性」と語学能力には親和性があると思われるためである。つまり、この高校では、エリート女子とは違うかたちのある種のエンパワーメントがおこなわれているといえよう。

その一方、「ノン・エリート共学校」の女子生徒は自尊感情、「社会・経済的成功志向」が低く、「努力・競争回避志向」が最も強い。そして性別役割分業を肯定し、旧来の男性規範、女性規範にも疑問を抱いていない。この高校は女子校から共学化した学校であり、学校側は特に男子生徒に対して、「男性性」と親和性が高いスポーツ系のクラブ活動に力を入れている。このような環境のもとで学校生活を送っているということも、彼女たちのジェンダー観の形成にある種の影響を与えているということが考えられるだろう。

\* 分析結果の詳細と参考文献等は当日のレジュメを参照願います。